法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

日本人英語学習者に効果的なコロケーション・ワークブックとは? : コロケーション・ワークブックの現状と改善点

小屋, 多恵子

(出版者 / Publisher)
法政大学小金井論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
72
(発行年 / Year)
2010-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007099

日本人英語学習者に効果的な コロケーション・ワークブックとは？

——コロケーション・ワークブックの現状と改善点——

小屋　多恵子

1. はじめに

コロケーションが英語運用能力に不可欠なものであるという考え方から日本の研究・教育の分野で注目されるにつれ、学習者のためのコロケーション・ワークブックも2000年の中ごろから少しずつ出版されるようになった。これまで単語集や単語のワークブックは数多く出版されており、語彙数が制限されている中学校・高等学校の英語教科書の補助教材として、また年齢を問わず語彙学習を支える教材として長年使用されているが、今後コロケーション・ワークブックもその役割を担うものとして期待される。

そこで、国内外で出版されているワークブックを、コロケーションの種類、問題の形式、ワークブックの作成方法などから分析・比較し、コロケーション習得の効果的な方法を主張しているこれまでの先行研究と照らし合わせることにより、利点・問題点を明らかにする。また結果をもとに、日本人英語学習者にとってより効果的なワークブックを提案する。

2. 研究の目的

次の2点を研究の目的とする。

(1) コロケーション習得のために出版されているワークブックを分析し、現状を把握する

(2) 現状をもとに日本人英語学習者にとっての効果的なワークブックを考察する

3. 研究の方法

3.1. 対象としたコロケーション・ワークブック

対象としたコロケーション・ワークブックは国内外7冊ずつ、合計14冊である。選定するにあたっては、次の2点を考慮した。(1) コロケーションを習得するためのドリルであることが明確に記載されていること。(2) 単語を1つずつ詳細に紹介する単語集のように、コロケーションをただ紹介するコロケーション集ではなく、あくまでも問題を中心とするワークブックであること。もちろん、数ある単語集の中には、コロケーションにも注目したものがたくさん存在するが、上記の2点から今回は除外した。また、同じタイトルでレベルの異なるワークブックも、扱っているコロケーションの違いや構成を調べるために分析対象とした。

表1：日本で出版されているもの

コロケーション・ワークブック	出版年
集中マスター　英熟語+コロケーション問題　厳選700題	2010
コロケーション徹底演習I	2004
コロケーション徹底演習II	2004
コロケーションで学ぶ生活英単語厳選385	2008
Collocations for writing	2010
英会話コーパスドリル	2005
英会話コーパスドリル（ビジネス編）	2007

表2：海外で出版されているもの

コロケーション・ワークブック	出版年
Natural English Collocations	2007
Collocation Extra	2010
English Collocations in Use	2005
English Collocations in Use (advanced)	2008
Key words for fluency (pre-intermediate)	2005
Key words for fluency (intermediate)	2004
Key words for fluency (upper-intermediate)	2004

3.2. コロケーション・ワークブックの分析項目

コロケーション・ワークブックの分析項目は、主に次の３点である。

I. What collocations are treated?

II. How many collocations are treated?

III. How are collocations treated?

この３点の下位範疇は、これまでのコロケーション実証研究の結果をもとに次の通りとした。

		項　目
I	1	どのようなコロケーションを収録しているか？
	2	コーパスベースか？日本人学習者の誤りやすいものを選択しているか？
	3	どのレベルの学習者をターゲットとしているか？
II	1	いくつのコロケーションを収録しているか？
	2	１日にいくつのコロケーションを学習するか？
III	1	コロケーションの提示はトピック別か？品詞別か？
	2	コンテクストの有無　（センテンス単位？長い文脈？）
	3	繰り返し学習できるような工夫があるか？
	4	コロケーションの学習難易度順から提示しているか？
	5	コロケーションの重要度順から提示しているか？
	6	問題の形式は？
	7	音声のサポートは？

上記の項目の拠所とした研究をいくつか挙げておく。まず、どのタイプのコロケーションが最も重要であるか（I-1）については、実証研究がこれまでなされてはいないが、多くの研究者が名詞を中心に覚えることを推奨している(Barnard, 2010; Cowie, 1998; 日向, 2009; 木塚, 2010; Lewis, 2000; 投野; 2005, 2007)。Lewis (2000) は、これまでのEFLコースおよびコースブックで「動詞＋名詞のコロケーション」を中心に扱っていることをあげ、make, do と共に使う名詞のコロケーションは、学習者にコロケーションの概念を紹介する最初のポイントして有益であると述べている。また、Barnard (2010) は、「コーヒーやサッカー（名詞)」について話すことはたくさんできるが、「飲むや蹴る」につ

いて話すことはあまりできないことを例に挙げ、名詞を中心に学んだ方がはるかに効率的に早く話せるようになると主張している。Cowie (1998) は、Kozlowska and Dzierzanowska が編集したコロケーション辞典 *Selected English Collocations* (*SEC* 1982) に列挙されているコロケーションはどれも名詞を含み、いずれの場合にも名詞が見出し語になっている点を指摘し、「見出し語となる名詞を中心としてそれと共起する動詞や形容詞を記述していくという *SEC* の特徴的な記述の方向性は、この辞書の中心となる発信型機能と、ライティングをする場合には名詞から動詞・形容詞の順に検索するものでその逆はないという認識を反映している。」(南出・石川, 284) と述べている。

コロケーション選択(Ⅰ-2) は、コーパスベースである方が望ましい (井上・赤野 2007; 投野 2005, 2007)。英語母語話者の話し言葉や書き言葉を集めたコーパス (e.g. BNC, Cambridge international Corpus of written and spoken English) を利用することにより、客観的に母語話者のコロケーション利用の実態を把握したり、学習者コーパス (e.g. International Corpus of Learner English, Japanese EFL Learner Corpus) によって日本人英語学習者が間違いやすいコロケーションを特定することによって、効率のよい学習が期待できる。

どのレベルの学習者をターゲットにしているか(Ⅰ-3) については、Koya (2006) によるとレベルによって重点を置くべき学習方法が異なる研究結果を示している。2000 語レベルの学習者は語彙自体が不足しているため、新出名詞と共起する動詞を組み合わせて学習すべきであるし、L1 と L2 で同じ構成素からなるコロケーションは L1 である母語のサポートを受けることにより学習を促進すべきであり、異なるコロケーションは L1 との違いを明示的に説明すべきであるとしている。一方、5000 語レベルの学習者は、ある程度のコロケーション知識は持ち合わせているものの、定冠詞や名詞の複数、前置詞などで間違いやすいことがある。従って、その点に注意を向けることが必要となってくる。

一度に学習されるべき単語の数(Ⅱ-2) については、Nation (1982) は、Crothers and Suppes (1967) を引用している。300 語からなるロシア語、英語の単語のペアリストを利用して調査したところ、一度に提示される単語数は単語自身の難しさの大きさによることが多いことがわかった。単語自身の難しさが小さい時は、一番大きなサイズの単語リスト 300 語を提示するのが効果があり、単語自身の難しさが大きい時は、一番小さいサイズの単語リスト 18 語を提示す

るのが良い結果をあげている。

Caroli (1998), Gitsaki and Taylor (1999), Hill (2002), Howarth (1998), Lewis (2000) によると、コンテクストの中でコロケーションを学習すべきである (Ⅲ-2) とし、さらにコンテクストの中でコロケーションをきちんと意識して指導すべきであると主張している。

繰り返し学習することによって効果がでること(Ⅲ-3) は、多くの研究者が認めているところである。読んでいるテキストに未知語が出てきた場合、平均6回以上の繰り返しが必要と結論づけられる研究が多い (Crothers & Suppes, 1967; Kachroo, 1962; Rott, 1999; Salling, 1959; Saragi, Nation and Meister, 1978; Zahar, Cobb and Spada, 2001)。今回のように意図的学習の場合の実証的研究はまだ報告されていない。池上 (2002) によると、少なくとも1カ月に3回の学習が必要であり、それによって、長期記憶に移行して定着するとしている。いずれにしても、3回以上の繰り返し学習を必要としていると言えるだろう。

コロケーションの学習難易度順・重要度順 (Ⅲ-4,5) については、Koya (2006) によると、受容コロケーション知識の発達には、一般語彙能力、日本語、動詞の脱語彙化、動詞の中核的意味が、発表コロケーション知識の発達には、一般語彙能力、日本語、動詞の脱語彙化、動詞・名詞の中核的意味、コロケーションの文法的な構造が影響しているという結果が出ている。また、Koya (2006) は習得の困難なコロケーションにも触れており、コロケーション自体の結びつきの強さや構成素の意味の透明性などが習得の難易を決める要因であるとしている。また、投野 (2005, 2007) は、コロケーションを習得する場合には英語母語話者の使用頻度を参考にすることが効率的に学習できると主張している。

4. データ分析と考察

以下に日本と海外で出版されているワークブックの長所と短所を個々に指摘する。

[日本で出版されているワークブックの特徴：長所]

(1) 初級者をターゲットにしたワークブックがある。

(2) 比較的短期間で学習できる (1-2カ月半)

(3) 1日20～40位のコロケーションを学習する。

(4) 1000位のコロケーションに限定している。

(5) やさしいものから、重要度の高いものからといった学習効果を踏まえた作りになっているものがある。
(6) 音声とともに学習できる。

[日本で出版されているワークブックの特徴：短所]

(1) コロケーションに特化しておらず、複雑な文法問題や慣用句も含んでいる。
(2) コロケーションの選定が様々（grammatical collocations, lexical collocations）
(3) レベルの範囲が広すぎる（e.g. 初級～全レベル）
(4) 編者が選定したコロケーションが中心。
(5) フレーズやセンテンス単位でコロケーションが提示されている。
(6) 問題の提示の仕方が単調である。

全般的に、日本人英語学習者をターゲットにし、学習効果を考慮した親切な作りになっていると言える。例えば、学習者が飽きることなく学習するために、1日に学習すべきコロケーション数をかなり限定し、比較的短期間で1冊を終えるような設定にしている。また、繰り返し学習の効果を期待して、学習記録が付けられる（e.g. 1度学習するごとにチェックを付けられる枡目がある。）ように配慮されているワークブックもある。音声を付加してあることも、コミュニケーション力向上を考えてのことであろう。

一方で、短所の多くが大学受験と関係がある。例えば、基礎から入試まで、1級から準2級まで幅広い学習者をターゲットしているものや、大学受験生を対象として作成されているものがある。そのため、語彙的コロケーションだけでなく、文法的コロケーションや句動詞や成句、複雑な文法問題までと幅広く学習できるようになっている。かなりたくさんの語彙の結びつきをターゲットにしているため、フレーズやセンテンス単位で提示し、空所補充問題を作成するといった比較的単調な作りになっている。このように、受験をターゲットに入れたコロケーション・ワークブックがあるのが日本のコロケーション・ワークブックの1つの特徴である。

[世界で出版されているワークブックの特徴：長所]

・ Lexical collocations が中心（名詞中心）
・コーパスを基にコロケーションを選定しているものが多い。
・レベル毎に扱うコロケーションを考慮している。また、間違いやすいコロケーションは上級レベルでも扱っている。
・前置詞や名詞の単複にも注意をしている。
・トピック別
・フレーズ～長文まで様々な文脈の中で学習できる。
・問題の形式が多岐にわたっている。

[世界で出版されているワークブックの特徴：短所]

・１つを除いてターゲットは intermediate level 以上の学習者を対象にしている。
・コロケーションの収録数がかなり多い。
・学習者のレベルに応じた提示の配慮はない。
・音声のサポートがない。

世界で出版されているコロケーション・ワークブックの特徴は主に２点である。１点目は、学習者のターゲットを中級者以上にしていることである。これは、これまでのコロケーション習得の実践研究において、対象が中級・上級英語学習者である場合が多いこと、また中級・上級英語学習者が英語を話したり書いたりする場合にコロケーションの誤りが多いことなどが理由であると考える。初級者は語彙レベルが未熟であり語彙を増やすことが大事であるが、同時にコロケーションの形で提示することが、学習の中間段階で語彙がより豊富になるという報告もある（Bahns, 1993; Caroli, 1998; Korosadowics-Stuzynska, 1980; MacCarthy & O'Dell, 2005, 2008; Twaddell, 1973）。２点目は、収録されているコロケーション数・種類・扱い方が豊富であることである。日本で出版されているコロケーション・ワークブックに比べ、語彙コロケーションに特化し、数多く収録されている。それを、様々な文脈からなる問題形式を利用して学習できるような工夫をしている。これは、利用対象が世界中の英語学習者であり、日本における受験事情を考慮することなく、コロケーション知識向上のためのワークブックであることが一番の理由であると考える。英語中級・上級学習者であれば、コロケーション知識を高めるために多くのコロケーションを収録しても自分で計画を立て、積

極的に学習できるであろう。そのため、日本のワークブックのように、学習者のために１日に学習すべきコロケーション数をかなり限定し、比較的短期間で１冊を終えられるように設定し、繰り返し使えるような学習記録履歴の欄を設けたりはしていない。

4. 日本人英語学習者用の効果的なコロケーション・ワークブックへの提言

日本と世界で出版されているコロケーション・ワークブックの長所・短所をもとに、日本人英語学習者を対象としたよりよいコロケーション・ワークブックのための改善点とそのために必要な研究を２点提案する。

(1) 語彙的コロケーションの中から学習段階ごとに習得すべきコロケーションを決定する。

コミュニケーション向上の目的から、語彙的コロケーションに着目し、学習段階に応じた提示が重要である。そのためには、英語母語話者のコーパスと日本人英語学習者コーパスの両方を利用して、基本コロケーションのリストを作成する必要がある。英語母語話者のコーパスからは、コロケーション知識、高頻度のコロケーションやコロケーション数を参考にする。話し言葉か書き言葉か？場面やコミュニケーションの対象、読み手に対する formality はどうか？年齢によってコロケーション知識は異なるのか？といった情報を得ることができる。また、日本人英語学習者のコーパスでは、間違いやすいコロケーションや習得しやすい・しづらいコロケーションなどを特定することができる。どの学習段階にどのようなコロケーションを学習すべきかを調べるために、レベル別コーパスの構築が望まれる。

コロケーション選択において１つ注意しなければならないのは、受験対象のテキストとコロケーション・ワークブックを切り離して考えることである。コミュニケーション力向上、つまり流暢で的確な言語使用の実現を目指し、語彙コロケーションを中心としたコロケーション選択をすべきであると考えるが、その際に受験にも利用できるとして難しい文法や複雑な文構造を学習する項目を取り込もうとすることが考えられる。コロケーションについては、英語母語話者であれ

ばコロケーション知識は数十万に及ぶとされ（Pawley & Syder, 1983: 213)、英語学習者がある程度のコロケーション知識を習得するためには、何年もかけて英語を読むしか方法がない（Mackin, 1978, 151-152）と言われている。そのような膨大で学習に時間を要するコロケーションを習得するためには、純粋にコロケーションだけを扱ったコロケーション・ワークブックを作成すべきである。

(2) 学習者の学習段階に即した効果的な構成にする。

学習効果を活かした1日20～40位のコロケーションを学習し、全体的には比較的短期間（1-2カ月半）で1冊終えることができる分量にし、繰り返し学習することが重要である点を一言書き添える。また、学習者のコロケーション習得のメカニズムをもとに、文脈を利用した多岐にわたる問題を提供し、コロケーション自体の難易度や重要度に考慮し、音声を付加すべきである。これは、繰り返し学習の重要性、コロケーション自体の難易度や重要度、文脈のサポートによる効果等先行研究（3.2.節を参照）を基にしたものである。しかしながら、先行研究の多くはそれぞれの国の英語学習者を対象にしたものであり、日本人英語学習者を対象とした実証研究が少ないため、日本人英語学習者を対象としたコロケーション習得に関わる要因（e.g. 一般語彙能力、日本語、動詞の脱語彙化）の検証が必要である。また、学習方法については、これまで帰納的学習、形式を重視した活動の効果が提案されている（Nakata, 2007; 阪上, 古泉, 杉浦, 2007)。学習者の学習段階や年齢によって効果的な学習方法に違いはあるのか、コンテキストを利用した提示の中でもどのようなものが効果的であるかといった提案ができるようさらなる研究が必要であろう。

5. おわりに

今回のコロケーション・ワークブックの長所・短所の分析に基づき、改良点を提示した。日本における更なるコロケーション研究によって、日本人英語学習者のコロケーション知識向上をサポートするコロケーション・ワークブックも改善・発展したものにすべきである。今回の分析はコロケーションの種類、問題の形式、ワークブックの作成方法の観点からであったが、種類においては語彙コロケーションか文法コロケーションか、語彙コロケーションの中でも動詞＋名詞の

コロケーションか、形容詞＋名詞のコロケーションかといったところまでしか分析できなかった。収録されているコロケーションの比較、例えば動詞＋名詞のコロケーションの中でもどのようなコロケーションを学習すべきであるとしているか（eq. do business, make money）といった具体例の比較はできなかった。この点については、今後の課題としたい。

参考文献

Bahns, J. (1993). Lexical collocations: A contrastive view. *ELT Journal.* 47(1), 56-63.

Barnard, K. (2010). 『100の超基本名詞で広がる英語コロケーション 2500』プレイス

Caroli, M. T. (1998). *Relating collocations to foreign language learning.* Unpublished master's thesis, University of Reading, Reading, United Kingdom.

Cowie, A. P. (ed.) (1998). *Phraseology.* Oxford: Clarendon press.（カウイー・エイ・ピー　南出康世・石川慎一郎監訳　(2009)『慣用連語とコロケーション』くろしお出版）

Crothers, E., & Suppes, P. (1967). *Experiments in second-language learning.* New York: Academic Press.

古澤寛行編著 (2004) 『コロケーション徹底演習 I』泰文堂

古澤寛行編著 (2004) 『コロケーション徹底演習 II』泰文堂

Gitsaki, C., & Taylor, R. P. (1999) . *English collocations and their place in the EFL Classroom.* Retrieved July 23, 1999, from www.jr.asu.ac.jp/~ rtaylor/collocations.html.

Hill, J. (2000). Revising priorities: from grammatical failure to collocational success. In M. Lewis (Ed.), *Teaching collocation* (pp. 28-46). Hove: Language Teaching Publications.

日向清人 (2009) 『ビジネス英単語』DHC.

Howarth, P. (1998). The phraseology of learners' academic writing. In A. P.

Cowie (Ed.), *Phraseology* (pp. 161-186). Oxford: Oxford University Press.

池谷裕二 (2002) 『最新脳科学が教える高校生の勉強法』東進ブックス.

井上永幸・赤野一郎編 (2007) 『ウィズダム英和辞典』第二版. 三省堂

Kachroo, J. N. (1962). Report on an investigation into the teaching of vocabulary in the first year of English. *Bulletin of the Central Institute of English*, 2, 67-72.

木塚晴夫・ Northridge, R. (2010). 『コロケーション活用英語ライティング』マクミランランゲージハウス.

Korosadowicz-Struzynska, M. (1980). Word collocations in FL vocabulary instruction. *Studia Anglica Posnaniensia*, 12, 109-120.

Koya, T. (2006). *The acquisition of basic collocations by Japanese learners of English*. Unpublished doctoral thesis. Waseda university, Tokyo, Japan.

Lewis, M. (Ed.). (2000). *Teaching collocation*. Hove: Language Teaching Publications.

Mackin, R. (1978). On collocations: Words shall be known by the company they keep. In P. Strevens (Ed.), *In honour of A. S. Hornby* (pp. 149-165). Oxford: Oxford University Press.

Marks, J & Wooder, A. (2007). *Natural English Collocations*. London: A&C Black.

McCarthy, M. & O'Dell, F. (2005). *English collocations in use*. Cambridge: Cambridge University Press.

McCarthy, M. & O'Dell, F. (2008). *English collocations in use advanced.* Cambridge: Cambridge University Press.

Nakata, T. (2007). English collocation learning through meaning-focused and form-focused tasks. *Bulletin of Foreign Language Teaching Association*, 11, 51-68.

Nation, I. S. P. (1982) .Beginning to learn foreign vocabulary. *RELC Journal, 13*(1). 14-36.

旺文社編 (2010) 『集中マスター　英熟語＋コロケーション問題　厳選 700 題』旺文社

Pawley, A., & Syder, F.H. (1983). Two puzzles for linguistic theory:

Nativelike selection and nativelike fluency. In J.C. Richards, & R.W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 191-226). New York: Longman.

Rott, S. (1999). The effect of exposure frequency on intermediate language learners' incidental vocabulary acquisition and retention through reading. *Studies of Second Language Acquisition*, 21, 589-619.

阪上辰也・古泉隆・杉浦正利 (2007)「Ajax を用いた英語コロケーション教材の開発とその利用」『LET 中部支部研究紀要』18. 1-10.

Salling, A. (1959). What can frequency counts teach the language teacher? *Contact*, 3. 24-29.

Saragi, T., Nation, I. S. P., and Meister, G. (1978). Vocabulary learning and reading. *System*, 6, 72-78.

佐藤誠司 (2008)「単語は正しい結びつきで覚える！コロケーションで学ぶ生活英単語厳選 385」『ゼロからスタート English』J リサーチ出版

投野由紀夫 (2005)『出る順マスター　英会話コーパスドリル　日常会話編』ALC

投野由紀夫 (2005)『出る順マスター　英会話コーパスドリル　ビジネス編』ALC

Twaddell, F. (1973). Vocabulary expansion in the TESL classroom. *TESOL Quarterly, 10*, 19-32.

Walter, E. & Woodford, K. (2010). *Collocation Extra*. Cambridge university press.

Woolard, G. (2004). *Key words for fluency (intermediate)*, Language teaching pubns.

Woolard, G. (2004). *Key words for fluency (upper-intermediate)*, Language teaching pubns.

Woolard, G. (2005). *Key words for fluency (pre-intermediate)*, Language teaching pubns.

Zahar, R., Cobb, T., & Spada, N. (2001). Acquiring vocabulary through reading: Effects of frequency and contextual richness. *Canadian Modern Language Review, 57*, 541-572.